建具の奥間柄

おくまがら

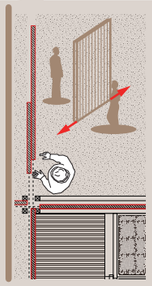
01 着想・背景【奥に見る京都の体験】

京都という町はとても奥ゆかしい。立面と対峙しながら町を歩き、土地に根を深く張る様な建物を見つけては堪能する。これは町屋の戸や窓が道路と繋がり、その奥を垣間見せるからだ。しかし宿へ帰るとその体験はまるで嘘だったかの様に個室へ誘われ、外界と遮断。これはいささか勿体無いのではなかろうか。日常にない物を求めて訪れる人々に必要なのは体験の「奥深さ」であり、体験の遮断ではないはずだ。敷地は私たちが最も「奥ゆかしい」と感じる土地、先斗町通を敷地におく。戸や格子、通り庭を始めとした「奥」が道を介して町屋同士で垣間見えるこの空間の関係性を私たちは【奥間柄】と呼ぼうと思う。

02 設計手法1【奥間柄ー奥行空間の事象・事物ー】

【奥間柄】という概念は、単なる物理的な空間の配置にとどまらず、むしろ訪れる者たちがその空間をどのように調停し、他者との繋がりを獲得していくかという営みの中に存在している。今回のプログラムであるゲストハウスでは異なる文化や価値観が交錯する場として、この考えは一層の意味を持つ。それぞれの個性ごとの奥間が存在し、'' 奥間 '' は外と内、他者と自分をなだらかに結びつけ、訪れる者がその場の持つ深遠な奥ゆかしさをそれぞれのリズムで感じ取ることができる認識を生み出す。そしてその関係によって生まれる事象、事物たちが互いの“間柄”をどう捉えるのか、そこにどういった距離を与えるのか、という問いに、今一度物理的な視点へと立ち戻り、建具による可変的な調停を可能にしてみるという解答を提案してみたい。

03 設計手法2【建具が調停する奥間柄】



ゲストハウスにおける間柄のパターンは、食事をする時、作業をする時、遊ぶ時など、無数に想定することができるだろう。つまり、そのシーンに応じて距離感を調律する必要がある。そこで、複数のレイヤーとして引き戸が機能するように幅木を建築全体のスケールへと拡張した。レーンを二つ設け、建具の幅や透明度を調整する事のできるディティールを設計している。多種多様な人々が共に住まうゲストハウスにおいて、人々の関係性は空間にダイレクトに表れる必要があるだろう。その為の建具の可能性を提示する。そしてここでの建具は、まさに【奥間柄】として日本らしさを纏いつつ、人々の絶妙な距離を物理的に、そして精神的に調停する役割を果たしてくれるだろう。